

分からないことの方が多い

1. 虚偽を真実と言いくるめる

梶山経済産業大臣が、トリチウム汚染水の海洋放出の代案として私たちが主張している、コンクリート固化による陸上保管案を否定したことを(2)で論じた。

「水和熱によって湯気が発生するから浴槽の水を全量海洋放出した方が環境のために良い」という発言は、まったく根拠がない。原子力問題に関する首相や大臣たちの言論がどうしてこうも恥ずかしい虚言になってしまうのだろうか。権力を維持しようとするものが部下の顔色を見て汲々とするのをペトラルカは次のように指摘している¹。

人間たちのこれほどの虚弱さ、これほどの窮乏のうちにあつて、きみは、皇帝や王侯もだれひとり完全には得られなかったほどの富や力をのぞんでいる。

しかし、欠乏を感じないことにまさる富があるだろうか。誰にも服従しないことにまさる力があるだろうか。実は地上の王や領主たちも、たとえ富み栄えているように思われても、やはり無数の欠乏を感じている。軍隊をひきいる指揮官たちも、その指揮下にあるようにみえる軍隊に従属している。

これは、国内外の歴史を通じて、ずっと見せつけられてきた事実である。

2. ルネッサンスの知の発見

知恵あるものは慎重であり、自分の無知をつねに自分に言い聞かせる。知恵のないものは大胆であり、断定する。西欧のルネッサンスの時代は、古代ギリシア・ローマの知的財宝が再発見された時代であった。その旗手となったペトラルカは、ギリシア人からギリシア語を学び、ラテン語に訳された断片しか読めなかったプラトンやアリストテレスを読み、伝えていった。そのようなパイオニアは、つねに戦わなければならない。かれは晩年に『自己自身および他の多くの人の無知について』という本を書いた²。「終章」でかれは次のように書いている。

自由という名称はだれにとってもひじょうに魅力的なので、無謀も蛮勇も、自由に似ているように見えるので民衆に好かれます。(中略)そのため、高潔な人たちを破廉恥漢がさいなみ、博学な人たちを無学な連中が、勇気ある人たちを臆病者どもが、善良な人たちを悪人どもがさいなみます。そして悪人どもの勝手気ままを善良な人たちは阻めません。なぜなら、悪い人びとは人数においてまさり、世人の人気においてもまさっていて、なんでも言いたいことを言えるのは良いことだと思ひ込んでいる人びとの人気をえているからです。(中略) 真理は深いところに埋められ、いわば深い井戸に沈められています。それゆえ天の至高の高みではなく、むしろ地底のもっとも深い隠れ処に真理を求めべきであり、・・・。

ソクラテスは言います。「わたしは何も知らないということ、このことだけを知っている」

¹ ペトラルカ近藤恒一訳『わが秘密』岩波文庫、1996年、p.109

² 邦訳の署名は『無知について』近藤恒一訳、岩波文庫、2010年、pp.145-153

3. 歴史の判定

18世紀啓蒙主義時代に、レッシングは『賢人ナータン』という戯曲を書いた³。そのさわりの部分をご紹介したい。舞台は12世紀のエルサレム。イスラム教徒の王サラディンが支配しているが、十字軍とともにやってきて1部分を占領しているキリスト教徒のテンプル騎士団の占領地域とユダヤ人の地域と、イスラム教徒の地域が併存している。サラディンは、賢人と評判のユダヤ人商人ナータンを呼び出して言いがかりをつけ、高額の資金拠出を申しつけようとする。そして、「ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の何れがもっとも優れているか」と難問を吹っ掛ける。ナータンはたとえ話をする。要旨つぎのようなものである。

ある父親が三人の息子を持っていた。代々跡継ぎ一人に宝石をちりばめたみごとな指輪を渡す習わしにしていた。しかし、この父親は依怙贖戻できなくてまったく見分けのつかない模造品を二つ作って、三人ともに指輪を渡した。父の死後、三人は裁判官のところへ行って、自分こそ正当な相続者だと主張した。裁判官はこういった。「父親はお前たち三人を分け隔てなく愛していたに違いない。だから、お前たちのうちの一人だけをひいきして、ほかの二人を苦しめたくなかったのだ。さあ！ いずれも精出して、身びいきのない無我の愛を欣求するがよい。めいめいが自分の指輪にちりばめてある宝石の力を堅持するように励み合いなさい、——そして柔和な心映え、やわらぎの気持ち、善行、神への心からなる帰依をもってその力を助成しなさい。そして宝石にそなわるもろもろの力がおまえたちの子孫の代に発揮されたら、数千年後のその時にこそ、わしはお前たちをこの裁判官席の前に召喚しよう。その時には、わしより賢明な人が、この席に座ってこういう判決を下すだろう——退廷してよい！」

何千年にもわたる事実の判定に委ねるという信頼を私たちがもち得るだろうか。
そして、本物という裁定を受けられるだろうか。

³ 篠田英雄訳『賢人ナータン』岩波文庫、1958年、pp.114-115